

## 溶解の体験とバウムにみる自我境界の在り方

新田 侑実

(山愛美ゼミ)

### 問 題

我々の自我は、ある程度の統合性を持ったものである。それゆえ我々は、あたかも己の自我が意志的・自覚的な存在であるかのような錯覚を引き起こすのであるが、我々は「意識できない」からといって、無意識的な世界との繋がりを無視して生きるわけにはいかない。人間が明確に意識できる領域など高が知れており、「人間精神の大部分はまだ暗闇におおわれている」(Jung, 1964)のである。

Neumann (1971)によれば、始原状態の未開人は意識の連続性がなく、その未だ分化されていない意識は、原初の混沌の中からやっと浮かびあがろうとしている状態であったという。そのような状態から人間は、「文明の状態に到達するまで、言い知れぬ年代を経過する間に、意識を徐々に苦心して確立してきた」(Jung, 1964)。このように、人間は、形無き混沌の世界から徐々に自我意識を形作ってきたのである。ここでいう自我意識とは、意識の連続性の増大・意志の強化・自発的行為の能力のことを指す (Neumann, 1971)。

では、この形作られた自我意識が無形態の領域へと再び戻っていく、あるいは回帰する過程はどのような意味を有するのであろうか。

Edinger (1985)は、錬金術的な変容を構成する主な作業法に焦点を当て、それを心の現象の形式面において捉える試みについてまとめている。錬金術の主要工程の一つに「溶解solutio」という作業法が存在するが、それは分化した物質がその本来の未分化な状態 第一質料 へと回帰することを意味する。この過程は、心理療法で生じるクライアントの変容の過程と対応している。つまり、「凝り固まったパーソナリティーの静的な側面はいかなる変化も許さないため、変容が進展するためには、これらの凝り固まった側面がまず解体さ

れるか、第一質料に還元されねばならない」のである。固体が新たな形態へと変容する際、一度液化し、その形態を溶かしめる必要があるように、形作られた自我が変容する際には、自我が一度無形態へと回帰、溶解する必要があるということである。

これは、新たな再生あるいは創造のための溶解であり、象徴的な自我の死と再生であると考えられる。形態を与えられていた自我が溶解される体験は、自我にとってみれば死の体験そのものであるが、その死は新しい再生や創造へと繋がっているためである。

このような自我の溶解は、自我の成熟具合により体験される様相が変わってくる。成熟した自我にとっての溶解は、自我の自律性が解体される恐れが生じるが、未熟な自我にとっての溶解は、母なるものへの至福の退行として体験され得る。未熟な自我における至福の溶解は、ウロボロスの段階への退行である。それは、原初の至福の状態ではあるが、自我は無に帰すことになる。

Neumann (1971)は意識発達の元型的な諸段階を検討する試みの中で、諸対立の相互結合という始原的存在の状態である原シンボル「ウロボロス」についての検討を行っている。その中で、自我が始原の一体感へと回帰する状態を「ウロボロス近親相姦」と呼び、「幼児的・胎児的自我は、ウロボロス近親相姦において深淵のウロボロスを、その溶解と死の性質にもかかわらず、たとえその中で我が身が消滅してしまおうが、敵対的なものとは感じない」と述べている。

しかし「快樂の海と愛による死の中で消滅すること」は、「死の沈下の後の新しい目覚めを新たな誕生として体験する」ことへと繋がっていくのである。ここにも、自己放棄の始原への回帰とそれに続く新たな自我意識の誕生という象徴的な死と再生のテーマが根底に流れている。

Edinger (1985) のいう、成熟した自我の溶解が、自我の自律性の解体を引き起こす状態や、Neumann (1971) のいう、未熟な自我のウロポロス近親相姦の状態は、現実世界においては深刻な心理的問題をもたらす。そのような問題と対峙する、あるいは巻き込まれてしまう人々は、元型的・神話的な世界と否応なく関わらざるを得ない。しかし筆者は、自我の溶解の体験は、必ずしも否定的な側面だけではなく、肯定的な側面を持つと考えられる。

人間の自我は、一度安定してしまえばそれで終わりというわけにはいかず、生涯を通じて構築と再構築を繰り返すのである。河合 (1977) は、「人間の意識は自我を中心として、ある程度の統合性と安定性をもっている」が、「その安定性を崩してさえも、常にそれより高次の統合性へと志向する傾向が、人間の心の中に存在すると考えられる」と述べている。これこそ自己実現への道なのであるが、その「安定性を崩し」、「高次の統合性へと志向」する動きは、まさに自我の溶解と新たな創造そのものである。

またNeumann (1971) は、「夢の世界へ沈んで行くと、人類発達の後期の所産である自我や意識は再び解体されてしまう」と述べている。人間は眠ることにより意識が低下し、夢の中で無意識的な世界との繋がりを再び取り戻す。意識の低下とはつまり、意識の一時的な溶解であり、「溶解をもたらすのは、自我の無意識との遭遇である」(Edinger, 1985)。意識の低下は、睡眠の他にも、病気や衰弱などで引き起こる。

このように、自我の溶解の体験は、心理療法という限られた空間に限定された話ではなく、我々の日常生活においても、程度の差こそあれ誰もが意識的あるいは無意識的に体験していることであると考えられる。では、そのような溶解の体験を、健常人々はどうのような実体験として、あるいはイメージや空想として体験するのであるのか。そして、それは体験者にとってどのような感情や変化を引き起こすのであろうか。そして、そのような体験を有する者に共通する自我の傾向はあるのであろうか。

描画法の施行 (バウムの幹先端処理)

上記の内容を調査するに当たって、本研究はバウ

ムテストを並行して行う。調査の内容を多面的に見るためには、一つの指標となる描画法の必要性を感じたためである。バウムを描く際、一番エネルギーを使う幹先端処理について岸本 (2002) は、幹先端の開放は自他・内外・事物間の「境界」の脆弱性を示唆すると述べ、このような事例を「境界脆弱症候群」と呼んだ。そして、「描かれたバウムが被験者の心理的内空間を表わすものと捉えるなら、被験者の心理的な内界と外界の間には、何らかの仕切り・境界・区別がある」とし、その内空間が閉じられていない場合を、内空間と外空間が交通している状態としている。

そこで本研究では、心理的な内界と外界の間の、あるいは意識と無意識の間の境界が弱い者は、溶解の体験を持ちやすいのではないかという仮説を立て、より具体的に溶解の体験と自我のあり様を見ていくために、バウムの幹先端処理を一つの指標として使用する。

目的と仮説

健常人における自我の溶解の体験については、あまり研究がなされていない。そこで、本研究では、健常人における自我の溶解体験と自我の境界の在り方との関連を調べる。具体的には、溶解の体験の有無とバウムの幹先端処理の開放・閉鎖の関連を調べる。また、報告された体験内容の分類を行う。方法としては、質問紙とバウムテストを並行して行う。仮説として、溶解の体験を有する者は、心理的な内界と外界を隔てる境界が弱いとし、開放型のバウムを描くものとする。また、溶解の体験を有しない者は、心理的な内界と外界を隔てる境界が強いとし、閉鎖型のバウムを描くものとする。

調査 1 : 溶解の体験の有無とバウムの幹先端処理の開閉について・溶解の体験の内容について

## 方 法

調査対象 K大学の学生108名に対し行った。

手続き 質問紙とバウムテストを描くためのA4サイズの画用紙1枚・Bの鉛筆1本を配布した。教示は以下の通りである。バウムを描き、質問紙に回答すること。バウムを描き終わった者から質問紙に取り掛かること。後日個別面接を予

定していること。そのため質問紙には氏名を記入してもらおうこと。また、何らかの理由で調査に協力できない者には、協力できない旨を意思表示しても構わないこと、協力できない者は何もしなくて良いことを伝えた。

それから、画用紙に「実のなる木を1本」描くように指示し、調査を開始した。なお、質問紙より先にバウムテストを行った理由は、質問紙の内容如何でバウムテストに意図的な要素が入り込む可能性を考えてのことである。質問紙調査は、各人の中で印象に残っている「自分を越えた何か大きなものに自分が溶けていくような体験（空想あるいはイメージ）」について、下記の質問項目からなる自由記述式で行った。

質問項目 多田(2003)が作成した質問項目を参考に、筆者が独自に質問項目を作成した。その内容は以下の通りである。

Q1. あなたの中で印象に残っている「自分を越えた何か大きなものに自分が溶けていくような体験」(あるいは空想・イメージ)はあるか

Q2. その体験(空想・イメージ)の具体的な内容

Q3. その体験(空想・イメージ)の最中、どんな感情を抱いたか

また、なぜそのような感情を抱いたのか

Q4. その体験(空想・イメージ)の前後で、あなたの中に何か変化はあったか

また、それはどのような変化なのか

## 結 果

質問紙調査の結果105名(男61名,女44名,平均年齢20.0歳)の質問紙とバウムを回収した(回収率97.2%)。3名は、バウムは描かれてあったものの質問紙が無記名であったため無効回答とした。この有効回答105名の内、Q1において「自分を越えた何か大きなものに自分が溶けていくような体験」がないと回答した人は65名(男39名,女26名,平均年齢20.2歳)であり、あると回答した人は40名(男22名,女18名,平均年齢19.6歳)であった。

なお、Q2の体験内容の分類に関しては、筆者がKJ法を用いて分析し、臨床心理学専攻の本学大学院生と話し合っ

て検討した。溶解の体験の有無とバウムの幹先端処理の開閉に関しては統計処理を行った。

体験内容の分類結果について 報告された溶解の体験についてKJ法で分類した結果9つの要素が抽出された。なお、本来「空・空気・大自然」に分類されるべきであろう「水の体験・水のイメージ」に関しては、報告数が多かったため独立のものと考えた。

体験内容の分類結果 分類結果は、空・空気・大自然(6名)、水の体験・水のイメージ(5名)、暗闇の世界(5名)、芸術(踊り・音楽・お芝居)(5名)、宇宙・限りのないもの・時間(4名)、大衆・人間の集団(3名)、母性・母なるもの・女性的なもの(3名)、ファンタジーの世界・壮大な世界観(2名)、その他(7名)の9つであった。

バウムの分類に際して 描かれたバウムの幹先端処理の分類は、基本的には岸本(2002)の分類に則り実施した(開放型-「完全開放型」「閉鎖不全型」「先端漏洩型」「冠漏洩型」/閉鎖型-「基本型」「放散型」「冠型」)。しかし、分類の結果、本研究においては、岸本(2002)の分類について、修正を加えた方が妥当であると判断し、以下の2点について新たな基準を設けた。

1つ目は、「開放型」の下位分類である「冠漏洩型」にさらなる下位分類を設けた点である。下位分類は「冠漏洩型-開放型」(閉じる努力をしていないもの)と「冠漏洩型-準開放型」(閉じる努力は窺えるものの完璧には閉じていないもの)とした。分類の結果、冠漏洩型のバウムが多かったためである。

2つ目は、「その他」の分類に変更を加えた点である。一本線やバウムの全体が描かれておらず開放・閉鎖の区別ができないものを「その他」に分類する所を、筆者は、紙面にバウムの全体が描かれておらず開放・閉鎖の区別がつかなくとも、紙面の範囲内で閉じる処理が行われていないものは「開放型」とした。なお、一本線のバウムは岸本(2002)同様「その他」とした。

溶解の体験の有無とバウムの幹先端処理の開閉について 「開放型」における溶解の体験あり群と

なし群の間には有意な差が見られなかった(表1)。よって、溶解の体験を有する者は開放型のパウムを描くものとする仮説とは異なる結果となった。また、「閉鎖型」における溶解の体験なし群を体験あり群と比べると、体験なし群では「閉鎖型」が有意に多く( $\chi^2(1) = 5.918, p < .05$ )、中でも「基本型」が有意に多かった( $\chi^2(1) = 4.455, p < .05$ )。よって、溶解の体験を有しない者は閉鎖型のパウムを描くものとする仮説通りの結果となった。

表1 体験の有無とパウムの開放・閉鎖

	体験あり群		体験なし群	
	(人数)	(%)	(人数)	(%)
開放型	19	(48)	24	(37)
完全開放型	0	(0)	0	(0)
閉鎖不全型	0	(0)	2	(3)
先端漏洩型	3	(8)	2	(3)
冠漏洩型	3	(8)	9	(14)
開放型	3	(8)	9	(14)
準開放型	13	(33)	11	(17)
閉鎖型	21	(53)	40	(62)*
基本型	2	(5)	9	(14)*
放散型	2	(5)	5	(8)
冠型	16	(40)	26	(40)
その他	1	(3)	0	(0)
その他	0	(0)	1	(2)
合計	40	(100)	65	(100)

\* $p < .05$

## 考 察

体験の有無とパウムの幹先端処理の開閉について「開放型」における溶解の体験あり群となし群の間には有意な差が見られなかったことの原因として考えられることに、第一にパウムテストの施行方法がある。岸本(2002)は、調査者と調査対象者が一対一となってパウムテストを行う場合と、調査対象者の集団に対してパウムテストを行う場合とでは、パウムの開閉に状況誘発的な変化を与えてしまう可能性を指摘している。つまり、一対一の場合引き起こされるであろう「心理学的緊張状態で、あるいは心理学的な距離の接近によって、心理学的な「境界」が脆弱となり、閉鎖型としてのシステムが揺らぐ」可能性があるとの指摘である。この指摘が正しい場合、一対一の施行方法の方が、パウムは開放することとなる。しかし、本研究においては、個別施行が困難であったため、心理学的緊張を誘発する状況下においての施行と

はならなかった。以上のことから、一対一の施行方法で実施していた場合、結果は違うものになっていた可能性が考えられる。

第二に、溶解の体験時の感情とパウムの開閉の問題が考えられる。筆者は仮説において、「溶解の体験を有する者は、心理的な内界と外界を隔てる境界が弱い」としたが、溶解の体験を有する者と一つに括ってみても、その体験を肯定的に捉える者と否定的に捉える者とは、パウムの開閉の傾向にも差異が生じるのではないだろう。つまり、「自分」というものの形が溶けていく体験が恐怖となる者の場合、意識的に(あるいは無意識的に)境界を隔てる努力をし、結果としてパウムが閉鎖する傾向にあるのではないだろうか。以上の仮説から、溶解の体験時の感情とパウムの開閉の問題は検討の余地があるように思われる。よって、この問題については調査2において検討を行なう。体験内容の各分類について KJ法において抽出された9つの体験内容について考察する。

### 空・空気・大自然

溶解の体験で一番多く報告されたものが、「自然的なもの」であったことに、筆者は日本人らしさのようなものをとても感じた。河合(1994)は、西洋と東洋の自然観の差異について論じている。西洋では「自然」を客観的对象として捉える(キリスト教の人間観によって人間とその他の存在物が区別されたため)が、東洋では自と他の二元論がそれほど明確には存在しない。科学技術の発達などの近代化によって、日本も西洋のように自然を客観的对象として捉える傾向が主流になったとはいえ、このような自然物に超越的なものを見ようとする日本人の心的特性は、未だ深く根付いているものように筆者には思われる。自と他の二元論の発展が、西洋の自我の確立・強化へと展開していくのであるが、この点に関しても、日本人は未だ西洋ほど明確な自我の確立・強化へと発展していないのではないだろうか。

このように考えると、自然的なものへの溶解の体験は、東洋特有の「自と他の曖昧さ」に起因しているものように思われるのである。近代における自我の確立・強化の方向性とは逆行となるこのような自然的なものへの溶解の体験は、まさしく自我の溶解の体験であるといえるのではないだ

ろうか。

#### 水の体験・水のイメージ

Jung (1954) は、「水は無意識を表すために一番よく使われるシンボルである」と述べている。それは、無意識の持つ流動性や創造性・無形態性・底知れない深淵さ・危険性等が、水の特性と類似しているためであると考えられる。また、宗教学者のEliade (1968) は、「水は源泉にして起源であり」、「水に浸すのは、形態の解消、先在しているものの形なき状態へ回帰することに等しい」と述べている。これを心理学的な面からみると、自我が水というシンボルで表現されるところの無意識へと回帰することを表しているとも言える。このように考えると、「自分を超えた何か大きなもの」への溶解の体験が水の体験（あるいはイメージ）として報告されることは、自然な流れであると言えるのではないだろうか。

他にも、溶解の体験が水の体験（あるいはイメージ）として報告された理由として、質問紙において表記された「溶ける」という言葉の持つ、水イメージへの連想の結果なども考えられる。

#### 暗闇の世界

Neumann (1971) は、人間の自我意識の誕生を創造神話から読み取る試みにおいて、創造神話の主題は「無意識の暗闇に対立する光として現れてくる意識の成立」にあると述べている。つまり、人間の自我が誕生する以前の世界は、無意識の支配する暗闇の世界であるという。それは、人類という歴史の始まりにおいても、また、個々人の自我という歴史のはじまりにおいても同様である。本調査によって報告された「暗闇」は、現実生活において体験し得る「暗闇」（例えば夜の暗闇や、地下室の暗闇・押入れの暗闇など、～における暗闇）ではなく、「暗闇そのもの」の体験がほぼ全てであった。これは、人間の理解を超える不可解・不明慮な領域における暗闇の体験であり、そのような暗闇の世界への溶解の体験は、より無意識的な領域へと接近しているものと考えられる。

#### 芸術（踊り・音楽・お芝居）

本調査で報告された「踊り」「音楽」「お芝居」は、本来もっと個別的に分類されるべきものであるが、ここでは大きく「芸術」という一括りで考察する。Neumann (1954) は、芸術の出発点は

「無意識の創造的機能」にあると述べている。そして、「集合的無意識の元型はそれ自体は形をもたない心理的な構造であるが、人間が形づくる芸術のなかで外化され可視的になる」という。このことを考えると、人々は芸術に触れることで、他者によって外化され可視的になった人類共通の無意識の内容物を垣間見、共有することの可能性を有するということである。しかしそこで、そのような芸術的なものから垣間見られる無意識的内容物に対して開かれた心性を有するかどうかの問題が生じてくるのであろう。本研究において報告された芸術的なものに対する溶解の体験は、芸術によって表現された無意識的内容物に対する溶解の体験である可能性は否めないように筆者には思われた。

#### 宇宙・限りのないもの・時間

近代科学の発展は目覚ましいものであるが、どれだけ科学が発達しても科学的な説明がつかない領域というものは未だ存在する。それは宇宙や時間など、人類のささやかな歴史を遙かに凌ぐ、我々の理解を超えた存在である。しかし、科学の手が届かない未知の領域は、我々の外界にしか存在しないものではない。河合 (1994) が「万人共通の未知の世界が外にあるように、内界にもわれわれはそれをもっている」と指摘するように、我々は無意識の世界という未知の領域を心の中に宿しているのである。このことを考えると、内界と外界の各領域の未知性が、心的に符合し合うという現象が生じてもおかしくないように筆者には思われる。つまり、本研究において報告された「外界の未知なる領域」に溶けていく体験は、内界の未知なる領域（無意識）への溶解の体験が、概念化される際に宇宙や時間という外界の未知なる領域に投影されて引き起こった可能性があるかもしれないと考えられるのである。また、その逆も起こりうるのではないであろうかと筆者は考える。

#### 大衆・人間の集団

人間の集団行為として重要なものに「オルギー Orgy」（狂躁、馬鹿騒ぎ、酒宴、酒池肉林）がある。Eliade (1968) は、オルギーの宗教的価値に関して、「人間はオルギーにおいて、個性を喪失して、唯一の生ける統一体の中にとけこんでしまおう」と述べている。祭りなどの場合も同様に、そ

の喧騒・熱狂の渦中において人々は、個人を形成する以前のカオス的な状態を再び体験するのである。人々をオルギーへと導く原動力としてEliadelは、秩序宇宙以前の全体性への一体化の願望が存在するという。本調査で報告された、大衆・人間集団に溶けていくような体験の中には、このような願望に起因されたものが存在するかもしれないと考えられる。それは、自我の確立によって隔てられていた人間と人間の、根源的で生々しい融解の体験である。

#### 母性・母なるもの・女性的なもの

個人としての母親に対して一体感を感じるのには、一定の期間母親の胎内で育つ哺乳類の生理的な特性によるものであろう。加えて、乳幼児期の母子一体感の経験は、成長した後も母親に包まれ守られていた記憶を保持させるものである。

また、個人としての母親を超えた普遍的な「母なるもの」を、Jungは「グレートマザー（太母）」と呼んだ。河合（1977）は、「母なるものの特性のもっとも基本的なものは、その「包含する」はたらきである」と述べており、包含するということが肯定的なものであれ否定的なものであれ、母なるものは全てを包んで自らと一体化するという。報告された溶解の体験が、個人的母の体験に基づくものなのか、普遍的母の体験に基づくものなのかは筆者には分からない。しかし、子どもが「母との接触を通じて母なるものの元型についての体験をもつ」（河合、1977）ことがあるように、個人的母と普遍的母は切り離された別個の存在などではなく、密接な繋がりを有しているのであろう。

#### ファンタジーの世界・壮大な世界観

河合（1991）は、「無意識から湧き出てくる内容に対して、意識が避けることも圧倒されることもなく対峙し、そこから新しく生み出されてくるものがファンタジーである」と述べている。ファンタジー自身が意識のコントロールを超えて、自律性を持って無意識から表出してくるのである。ファンタジーをこのように考えると、体験者にとってのファンタジーの内容は、体験者の内的世界の様相を如実に表しているものと考えられるのではないだろうか。そのようなファンタジーの世界（あるいは壮大な世界観）への溶解の体験は、己の深層部分との関わりを内的に体験しているもの

であるかもしれないと考えられる。

調査2：体験時の感情とバウムの幹先端処理の開閉について

調査2では、溶解の体験時の感情とバウムの開閉の問題を検討する。そのために、体験時の感情の快（肯定的感情）・不快（否定的感情）と、バウムの幹先端処理の開閉・閉鎖の関連を調べる。方法としては、質問紙とバウムテストを参考にし、[快感情 - バウム開] [快感情 - バウム閉] [不快感情 - バウム開] [不快感情 - バウム閉] の4タイプとそれぞれの体験内容に、何らかの傾向があるのかを調べる。また、上記の4タイプの中から、筆者が考える所の各タイプの特徴を有していると思われる者数名に対して個別面接を行い、事例とする。仮説として、溶解の体験において、快（肯定的）感情を有する者は、体験を受容しているものとしてバウムが開閉する傾向にある。また、溶解の体験において不快（否定的）感情を有する者は、体験に抵抗しているものとしてバウムが閉鎖する傾向にある。そのため、[快感情 - バウム閉] よりも [快感情 - バウム開] の方が多く報告され、[不快感情 - バウム開] よりも [不快感情 - バウム閉] の方が多く報告されるものとする。

#### 方法1

手続き 調査1において報告された、溶解の体験を有する者のバウムの開閉と体験時の感情を分類した。[快感情 - バウム開] [快感情 - バウム閉] [不快感情 - バウム開] [不快感情 - バウム閉] の4タイプに分類し、統計処理を行った。

感情の分類について 感情の分類に関しては今のところ定説がなく、研究者それぞれの考え方により分類されているのが現状である（福田、2003）。そこで本研究では、質問紙により体験時の感情が言葉（文字）として表現されたため、言葉から感情を分類したFischerに則り分類を行った。

Fischerは多種多様な感情語を「愛」「楽しさ」「驚き」「怒り」「悲しみ」「恐れ」の6種類に分類している。しかし本論は、細かな感情それぞれに焦点を当てることが目的ではなく、感情の快（肯定的）感情・不快（否定的）感情に焦点を置いている。そのため、Fischerの分類を更に「愛」「楽

しさ」「驚き」を快（肯定的）感情、「怒り」「悲しみ」「恐れ」を不快（否定的）感情の2種類として分類を行った。なお、「自分でもよくわからない感情」や「感情というものは特にない」、「まったく何も感じない」等の回答は「その他」とした。

## 方法 2

調査対象 [快感情 - バウム開] [快感情 - バウム閉] [不快感情 - バウム開] [不快感情 - バウム閉] の4タイプの中からそれぞれ、筆者が考える所の各タイプの特徴を有していると思われる者1~2名ずつ選び、合計5名（男4名、女1名、平均年齢20.4歳）に対し個別面接を行った。

手続き 個別面接は半構造化面接法に従い筆者が行った。面接室において約15分程度行った。本論文に質問紙の回答とバウム・個別面接の内容を載せることに承諾を得、プライバシーの保護には細心の注意を払う事を伝え、会話の内容を録音することに承諾を得てから、ICレコーダー（ICR S2 40RM）にて録音を行った。

個別面接を行う目的は、質問紙において得られた回答をより詳しく聴くことにある。また、面接者の語りに伴う感情の機敏や表情、情動などの非言語的な要素を感じ取る・汲み取るためでもある。調査2においては体験時の感情に焦点を当てているため、面接者の体験の語りを直接聴く必要があると考えるためである。

質問内容 個別面接においては、具体的な体験内容、体験時の年齢・期間（一回きりのものか、連続的なものか。連続的なものであればその発生~消失期間、あるいは今も続いているのかどうか）、

体験時の状況・環境（どのようなときにそのような体験（空想・イメージ）をするのか）、体験時の感情、体験前後の変化の有無、変化がある場合、変化の内容の6つの質問を行った。なお、面接の流れで、筆者が気になった点・詳しく聴きたい点・疑問に思った点などについては、適時質問を行った。

## 結 果

閉鎖型群を開放型群と比べる（表2）と、閉鎖型群では「不快」感情が有意に多い結果となった（ $\chi^2(1) = 3.769, p < .05$ ）。これは [不快感情 -

バウム開] よりも [不快感情 - バウム閉] の方が多く報告されるものとする仮説通りの結果となった。しかし、開放型群と「快」感情の間には有意な差が見られず、[快感情 - バウム閉] よりも [快感情 - バウム開] の方が多く報告されるものとする仮説とは異なる結果となった。

表2 体験時の感情とバウムの開放・閉鎖

	閉鎖型		開放型	
	(人数)	(%)	(人数)	(%)
快	6	(29)	10	(53)
不快	10	(48)	3	(16) *
その他	5	(24)	6	(32)
合計	21	(100)	19	(100)

\*  $p < .05$

## 事 例

事例の記述について 本研究において報告する事例の内容は、面接者の語りの本質を損なわない様努めて筆者が簡略にまとめたものである。なお、プライバシーの問題から、本人が語った言葉をそのまま用いることは避けている。

事例1（18歳、女性）[不快感情 - バウム開]

[語りの内容] 友達と騒いだ後や楽しく過ごした後に一人になると、真っ暗な何も無いところに自分が吸い込まれていくようなイメージが無性に湧いて来る。体験時は強い孤独感や不安感がある。そのような時は感情に任せて泣いたり寝たりして、あまり考えないようにしている。たまに、楽しんでいる最中にもそのようなイメージが湧いてくるが、そういうときも考えないようにしている。暗闇は恐怖で、自分は止まっているけれど向こうから近づいてくる感じである。

[筆者によるバウムの所見] 幹先端は開放しており、それを覆う樹冠は幹との接点で少しの隙間を残し左右とも開いている。地面や根は描かれておらず、木自体が切り取られて宙に浮いているかのような感じを受ける。根の下の空白が異様に目立つように感じる。また、果実や、樹冠の内側でその豊かさを表わしている曲線、幹の内部の線が全て3つずつ描かれてあることが興味深い。なお、全てすっきりとした一本線で描かれてある。



図1 事例1のバウム



図2 事例2のバウム

## 事例2 (22歳, 男性) [快感情 - バウム開]

【語りの内容】水の広がりの上に浮いているようなイメージ。海・湖など比較的静かな水の動きに対してそのようなイメージが湧いてくる。水平線がどこまでも広がっていきような、水面にふわっと浮いているような感じになる。自分と水が融合するような、ふやけていきような感じである。体験時は眠りに就く前のような感覚で安心感がある。水に対する恐怖心などは一切無い。体験後はもやもやが解けてリフレッシュしている。

【筆者によるバウムの所見】木全体が上方下方共に紙面に収まっておらず、樹冠も果実も一切描かれていない。幹先端は用紙に描き切れておらず不明であるが、用紙内においては閉鎖されていない。太い根が重なるように何本も下方に伸び、枝の部分より丹念に時間をかけて描写されているように感じる。画用紙の下半分を根が占領している。また、全体的に短い線を繋げた様な描写で、薄い筆圧のせいか繊細な印象を受ける。

## 事例3 (21歳, 男性) [不快感情 - バウム開]

【語りの内容】昔から何度も見る夢だが、何度も

見ているうちにイメージとして頭に残るような感じになってきた。内容は、うす暗い体育館のような板張りの密室で、ひたすら球のようなものが近づいたり遠ざかったりを繰り返すのを目だけで見続けるというもの。だんだん球が近づくにつれ頭痛がしてきて、しばらくすると球が消え、球と一緒になったような感じがする。そして、目線が高くなり視界が開け全能感のようなものを感じ恐れを感じる。取り返しがつかない所までいってしまったという恐れである。

【筆者によるバウムの所見】しっかりとした幹が大地の上に乗っすぐ立っている。幹先端は樹冠で覆われかけているが、所どころ隙間が空いている。樹冠は豊かで、樹冠の中で細い枝が四方八方に伸びている。リンゴと思われる果実が、大きさもばらばらに4個生っており、地面にも1個落ちている。左側にある、異様に垂れ下がった1本の細い枝に、小さなリンゴが生っているのが印象的である。繊細な線で細やかに描かれてあるが、意志的な描き方である感じを受ける。





図3 事例3のパウム

事例4 (19歳, 男性) [快感情 - パウム閉]

[語りの内容] 普段生活している中で「日常ではありえないだろう」と思うような空想が浮かんでくる。そしてそれが頭から離れない。例えば、現実生活で魔法が使えたり、ファンタジーの世界で生活したりというような空想である。そのことを考えると現実から頭が離れていく。現実と空想をきっちり分けていないといけなと思う。しかし、空想やファンタジーの世界の方が現実ならば良いのに、と思う。

[筆者によるパウムの所見] 樹冠・幹・根が一本の線でしっかり囲うように描かれており、一見木のようには見えない。形容しがたい形をしている。果実は8個生っており、それぞれ小枝によって1個・2個・4個のまとまりとなって奇妙な連なりを見せている。樹冠や幹の内部には、流れるような細かい線がたくさん描かれている。筆圧の強弱の差が激しく、鉛筆が擦れて黒くなっている箇所もある。木の内部においては、鉛筆が踊っているような描き方である感じを受ける。

事例5 (22歳, 男性) [不快感情 - パウム閉]



図4 事例4のパウム

[語りの内容] 溶けていくというよりは飲み込まれていくという感じである。入道雲を見つめているときや、海・プールに入っているときに感じる。雲や水などの形が定まっていない「不安定さ」を持っているものに対して感じるのだと思う。自分や他者やその他のもの全てにおける存在意義を考えたとき、明確な答えは無いと感じる。しかし答えは存在しているし、それはただ形を変えるだけであるように思う。そのようなことを考えていると、自分の不安定さが雲や水の不安定さに溶けていくように感じる。体験後は疲労感がある。一体化したもから抜け出してきた感じである。

[筆者によるパウムの所見] 樹冠がとても大きく、用紙の上半分を占領して描かれている。そのため幹は短く平べったい。幹先端は何枝にも分かっているが、全て先細りして閉じる処理が行われている。左側の枝にリンゴと思われる果実が1個だけ生り、黒く塗りつぶされている。幹と地の接点においては、殴り描きのような地面(草むら?)がある。樹冠の内部にはまったく何も描かれておらず、用紙の下半分の賑やかさと比べると、その空白が目立つように感じる。



図5 事例5のバウム

## 考 察

まず、統計処理の結果から考察する。調査2の結果において、[不快感情 - バウム閉] が統計的に有意であることが分かった。このことから、溶解の体験の際に生じる負の感情が、体験者の無意識的なものへと融合する傾向をバウムの境界によって隔てる働きへと繋がっていることが分かる。無意識の世界は創造的で魅力的な世界であるが、それは無意識の肯定的な側面でしかない。無意識は、人間の理解を超える非論理性や混沌が渦巻く狂気の世界でもあるのである。安易に深みの世界へ下降することの危険性について山（2003）は、「精神に混乱をきたし、ついには、精神病レベルの病態の発症に追いやる可能性も孕んでいる。」と述べている。何の心構えもなく無意識の世界へと足を踏み入れることの恐ろしさを考えると、このような不快感情に伴う「囲い（境界）」があることはむしろ安心すべきことのようにも思える。創造的で魅力的な世界だからといって、安易に接触しても良い領域ではないのである。

このように考えると、バウムが開くことが良い・

悪い、溶解の体験があることが良い・悪いという次元の話ではないことが深く理解される。体験者それぞれの心的状態によって、自我の溶解の体験は実りにもなるし、身の破滅にもなるのであろう。そして、それゆえ身の破滅を避けるための「囲い（境界）」が重要になってくるのである。

次に [快感情 - バウム開] [快感情 - バウム閉] [不快感情 - バウム開] [不快感情 - バウム閉] の4タイプの傾向を事例と重ねて考察する。

まず、[快感情 - バウム開] である事例2である。事例2は水のイメージ・水の体験の報告であった。水への溶解のイメージ（体験）が眠気を誘い、そこには安心感が存在するという。筆者は面接者の語りを、水に抱かれてたゆたう安らかさやその静謐な時のイメージが伝わってくるような心持で聴いていた。このような場合の水は、無意識のシンボルとしての「源泉の水」「起源の水」という表現よりも、「母なる水」つまりは羊水のイメージに近いのではないだろうか。そこでは、胎児は安心して眠るのである。事例2のバウムを見ても、幹先端は用紙に描き切れておらず不明であるが、用紙内においては閉鎖されていない。また幹先端に限らず、幹や根の描写も短い線を重ねた様な描き方で、その境界の隙間から絶えず外界との接触を行っているかのような印象を受ける。以上のことから、[快感情 - バウム開] は、溶解の体験を自ら受け入れ、且つその体験が何らかの肯定的な効果（事例2の場合、「リフレッシュしている」）をもたらしていると考えられる。自我が水の体験（イメージ）において、無意識的なものへと溶解し、何らかのエネルギーを獲得して再び構築されていくのである。もちろん、一人の事例における理解が、全ての [快感情 - バウム開] の人に共通するとは考えていない。しかし、何らかの共通項が垣間見られれば、という考えである。

次に [快感情 - バウム閉] である事例4を見ていく。事例4はファンタジーの世界のイメージである。ファンタジーとは、意識のコントロールを超えて無意識の内容物が表出してきたものであるが、事例4の面接者はそのようなファンタジーが現実起こらないことを十分に知っただけで、そのような世界に留まることを望んでいるように見える。空想の表出する力と、その空想が現実生

活を乗っ取らないようにするための現実的な思考の力が拮抗している状態ともいえる。このことを考えて事例4のバウムを見てみる。事例4のバウムは、幹先端のみならず木そのものが一つの塊のようにきっちりと閉じている。筆者は、面接者の語りとバウムから、面接者の内的世界の豊かなファンタジーや空想が境界を超えて現実生活に表出することを、自我が囲い（境界）を持ってして阻止している感じを受けた。自らきっちり囲いをしておくことで、空想と現実の境界が融解することを避けるかのようである。このように[不快感 - バウム閉]タイプは、内界の豊かなイメージが外界へと溶け出さないよう自ら閉じる傾向があるように思われる。そして、閉じられた内界の世界において、豊かなイメージへの溶解を体験するのであろう。

次に[不快感 - バウム開]である事例1と3を見ていく。事例1は暗闇の世界のイメージである。得体の知れない暗闇に否応なく吸い込まれていくというのは壮絶なイメージである。そのような暗闇との接触が恐怖として体験される場合、バウムは閉じる傾向にあることは調査2において統計的に証明された。では、否定的な感情を有しているのに、バウムが開放することにはどのような意味があるのだろうか。これに関して考えられることが2つある。1つ目は体験者の自我の囲いの弱さであり、2つ目は無意識的なものの威力の強さである。事例1の面接者は「考えないようにしている」にも関わらず一方的に「暗闇が近づいてくる」のを避けることが出来ない。ここに、避けようとしても避けきれない圧倒的な力の存在を感じる。事例3に関して、悪夢」という不可抗力の無意識の力に晒されている。自らの意思に関係なく「取り返しがつかない所」まで連れて行かれるのである。事例1のバウムは、幹先端は開放しており、樹冠に関してあと少しという所で開いている。事例3のバウムに関して、閉じる努力は窺えるものの、やはり所どころ開いている。これは、無意識の方から内空間を閉め切らせようとしない何らかの高圧的な力が働いているように見えるのである。[不快感 - バウム開]の報告数は3件と少なく、一般的にはあまり報告されないようなタイプであることが窺える。そして、そ

れは非常に危険性が高いものであると考えられる。最後に[不快感 - バウム閉]である事例5を見ていく。事例5は、水のイメージ・水の体験の報告である。「飲み込まれていく」という表現がなされており、その体験への否定的な感情が窺われるが、事例1や3のような強烈な恐怖の体験のように感じられない。どこか一線ひいた冷静さが感じられるのである。事例5は、全ての存在物の不安定さと、雲や水の不安定さがイメージ的に連結し、溶解の現象を起こしている。しかし、疲労感はあるもののその状態から「抜け出して」くる事が出来るのである。そして、そのような体験に対しての自身の私見が推測されており、体験に対しての客観的な視点が生じているように思う。事例5のバウムを見てみると、幹先端は閉鎖されているのが分かる。筆者には、事例5の報告の持つ客観性・冷静さが、内的な空間と外的な空間の間にきちんと境界が引かれていることに起因しているように思われるのである。以上のことから、[不快感 - バウム閉]は、不快感を有しているながら、それが自身を脅かすほどの脅威の体験とはならず、その背景に自我の強固さを有している傾向があると考えられる。

## まとめ

本研究では、バウムを援用しながら、健常者における自我の溶解の体験について見てきた。神経症水準・精神病水準の様相を呈しておらずとも、我々は自我の溶解の体験を有することが可能であることが分かった。しかし、神経症水準・精神病水準とまではいかなくとも、報告の中には、筆者の手には負えないと思われるようなレベルのものも少なくないと感じられた。溶解の体験と簡単に言っても、自我の溶解は「死」の体験に通じるものであり、強烈な負の感情を伴うこともある。そのような場合、自我の境界（囲い）がとても重要になってくることは本論にて論じた。

しかし反対に、我々は自我の境界（囲い）があるからこそ、深みの世界へと潜り込んでも、再び現実の世界へと浮上することが可能となることもあるであろう。冒頭にも述べたが、我々は無意識的な世界との繋がりを無視して生きるわけにはいかないのである。そして、我々が無意識的な世界

と上手く繋がりながら生きてゆくためには、己の自我の在り方や、無意識的な世界との接触の危険性・創造性を深く理解した上で、自我の溶解を体験することが重要になってくるのではないだろうか。

## 謝 辞

本論文作成にあたり、ご協力して頂いた京都学園大学人間文化学部赤間健一講師に深く感謝致します。

## 文 献

- Edinger, E. 1985 Anatomy of the Psyche, Open Court Publishing Company. 岸本寛史・山愛美 (訳) 2004 : 心の解剖学 錬金術的セラピー原論 新曜社
- Eliade, M. 1968 Traite d'Histoire des Religions, Payot, Paris. 久米博 (訳) 1974 : エリアーデ著作集第二巻 豊穡と再生 宗教学概論 2 せりか書房
- 福田正治 2003 感情を知る 感情学入門 ナカニシヤ出版
- Jung, C. G. 1954 Von Den Wurzeln des Bewusstseins, Rascher Verlag. 林道義 (訳) 1982 : 元型論 紀伊国屋書店
- Jung, C. G. 1964 Man And His Symbols, Aldus Books Limited, London. 河合隼雄 (訳) 1975 : 人間と象徴 無意識の世界 (上巻) 河出書房新社
- 河合隼雄 1977 無意識の構造 中公新書
- 河合隼雄 1977 昔話の深層 福音館書店
- 河合隼雄 1991 ファンタジーを読む 楡出版
- 河合隼雄 1994 河合隼雄著作集11 宗教と科学 岩波書店
- 岸本寛史 2002 バウムの幹先端処理と境界脆弱症候群 心理臨床学研究, 20 (1), 1-11
- Neumann, E. 1954 Kunst und schöpferische Unbewusstes, Walter-Verlag. 氏原寛・野村美紀子 (訳) 1984 : ヨング心理学選書 芸術と創造的無意識 創元社
- Neumann, E. 1971 Ursprungsgeschichte des Bewusstseins, Walter-Verlag. 林道義 (訳) 1984 : 意識の起源史 紀伊国屋書店

- 多田和外 2003 水の体験にみる「異界」イメージと心の位相 京都学園大学人間文化学部生論文集 第2号
- 山中康裕・皆藤章・角野善宏編 2005 京大心理臨床シリーズ バウムの心理臨床 創元社
- 山愛美 2003 言葉の深みへ 心理臨床の言葉についての一考察 誠信書房